



いはいま・ひろゆき ●1960年北海道生まれ。1984年道都大学(現、星槎道都大学)社会福祉学部社会福祉学科卒業。児童養護施設の児童指導員を経て、1993年旭川福祉専門学校専任教員。1996年旭川大学女子短期大学部非常勤講師。1997年北海道教育大学教育学部旭川校非常勤講師。2005年道都大学社会福祉学部教授。同学部長を経て2021年より現職。



荒波に挑むトップ

私の改革論

No.46

星槎道都大学・学長
飯浜 浩幸

取材・文/仲谷宏 撮影/高橋龍次

小規模大学だからこそ 学生成長率No.1の大学へ

地域とグループの連携の強みを生かして、教育の充実を図る

キャンパスにあふれる アットホームな雰囲気

本学は、札幌市と新千歳空港の中間に位置する北広島市にある大学です。入学定員は260人で、経営、社会福祉、デザイン、建築を専門分野とし、小規模ながらも多彩な学びを提供しています。本

学の強みは、この規模感を生かした大学運営にあります。

本学を訪れた人がまず驚くのは、学生からのあいさつです。あいさつが習慣になっているスポーツクラブ所属の学生が多いこともありますが、他の学生にも、その習慣は浸透しています。学生同士、キャンパス内でお互

いに顔を合わせる頻度が高く、同じ大学の一人としての仲間意識が育ちやすい環境にあるからでしょう。あいさつをする学生に感化され、自然な行為として学生たちの間に広まっています。

同じことは、学生と教職員との関係でも起きています。上級生が教職員と親しげに話している様子

学生は、在籍する学科の専攻・コースの中からメジャープログラムを1つ選択するとともに、外部とも連携し学部横断型で開設している24のサブメジャー・プログラムの中から、自分の目標に合ったものを選んで履修します。その際、1つ以上のプログラムの修了が卒業要件となっています。メジャープログラムで自分の核となる学力・知識を身に付け、サブメ

ジャー・プログラムで資格取得や実践力の養成に取り組む。自らの専攻に加え、他学科や学外の学びを総合して「なりたいたい自分」や「やりたいこと」の実現をサポートするのが、この制度の狙いです。

北広島市では今、2023年に北海道日本ハムファイターズが自前の球場をオープンさせる計画が進んでいます。球場周辺はボールパークとして整備される予定で、官民による街づくりも並行して動いていきます。そこで、サブメジャープログラムに「ボールパークプログラム」を開講し、ボールパークの建設や、それに伴う街づくりなどに学生が関わる機会を提供しています。そのほかにも、「地域共生プログラム」や「みらい創造プログラム」などを開設し、地域の課題や未来について、街の人

たちや地元企業と共に考える

PBLなども取りそろえています。同じグループの通信制大学、星槎大学との連携では、教員免許の取得をめざす通信教育課程を提供しています。これにより本学では、幼小中高・特別支援の教員免許が取得できます。

教職課程に限らず、将来的には星槎大学との連携において、通信と対面をシームレスに組み合わせ、社会人や、対面が苦手な学生などを対象とした教育プログラムの開発も可能なはず。それは、本学がめざすべき将来像の一つになると、私は考えています。

学生を見ていることが 高大接続での強み

教育だけでなく学生募集においても、小規模ならではの強みが生かれています。

入試広報課の職員は、学生全員の状況をほぼ把握しています。加えて、ポータルシステムからは学生の成績や単位取得状況、DIPの到達度をリーダーチャートで示した情報などが取り出せます。高校訪問時には定性と定量の両面、その高校の卒業生の様子をフィードバックしており、これが高校との信頼関係の構築に役立っています。

す。高校からは進路指導の取り組みや、本学に期待することなどの情報を収集し、入試改革などに生かしています。

このサイクルが、本学の学生募集のベースであり、これは職員が学生を日頃からよく見ていることと、学修成果の可視化や情報の一元管理をいち早く進めてきたからできることだと言えます。

今後の課題は 内部質保証のPDCA

本学は、「学内の雰囲気よさ」や、「ユーザー目線」「学生ファーストの意識」といった、形のないものを大切に、魅力を高めてきました。しかし、さらなる向上をめざすには、これらの可視化を進めて、

取り組みの継続性を高め、状態を客観的に点検する必要があります。そのため今後は、内部質保証のPDCAサイクルを回す学内体制の強化を進めていきます。私は、学長の一番の務めは、

を普段から目にする中で、新入生も、それを当たり前と考えるようになりやすいです。学生が教職員に話しかけやすい空気も、学生同士が感化し合う中で形成されているのです。

こうした本学のアットホームな雰囲気は、オープンキャンパスで体感することができます。学生と教職員が気兼ねなく語らう様子を見て、本学への入学を決める高校生も少なくありません。

産学連携を強化し 教育の充実を図る

大学改革においても、小規模であることは、むしろメリットだと考えます。学内の資源に限りがあるため、必然的に外部に目を向けることになるからです。外部の人たちとのつながりは、さまざまな情報やアイデアをもたらします。それらが刺激となり、新たな挑戦に向かう意欲がかき立てられますし、得られた情報を関係者で共有する機会が増えれば、学内の風通しもよくなります。

2021年度から導入したメジャープログラム、サブメジャー・プログラムは、地域や、本学が加入している星槎グループとの連携から実現したものです。

学外の声を聞き、それを学内の改革にきちんと反映させることだと考えています。中期計画の遂行には、学外の人たちの協力が欠かせません。外部の声をもって生かせるしくみにするつもりです。

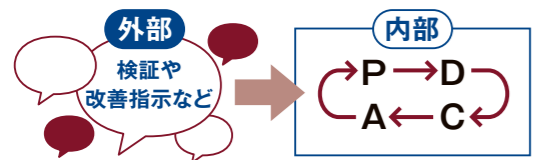
学修成果の可視化への取り組みもさらに進化させます。可視化しているDIPの到達度を、ディプロマサブリメントの形にして、学生や外部に示せるものにしたと思っています。DIPの達成に関する大学の責任を明確にするとともに、全ての関係者が共通の視点で学生の成長を確認し、一緒に喜び合える大学にするためです。

今後も本学らしさを生かした改革を推進していきます。

* 学位の内容を説明・証明する証書

注目の経営指標

外部の声を生かした 内部質保証の実践度



学長の一番の役割は、学生や保護者、高校教員、地域などの外部のステークホルダーの声に耳を傾け、それが学内の教育・研究の改善に生かされているかをチェックすることだ。外部の力を借りなければ中期計画の達成はできない。そのため、外部とつながるしくみを構築する考えだ。